□海外文献紹介□

ラットにおける後天的な潰瘍易罹患性の垂直的伝達

Vertical Transmission of Acquired Ulcer Susceptibility in the Rat: *N. J. Skolnick et al* (Science 208: 1161～1163, 1980)

ラットの仔を早期に母親から離すと拘束潰瘍にかかりやすくなることが知られている．すなわち生後21日（正常離乳期）に母親から離した仔ラット（N）の日齢30日における拘束潰瘍発生率は10～20%であったのに対して，14日で離した仔ラット（E）では80～90%であった．今回は更に以下の実験を行った．

（実験1） 21日および14日で母親から離したメス仔ラットを100日まで普通に飼育後に正常雄ラットと交配して生まれた F_1 ラットをそれぞれ21日および14日に離して日齢30日における拘束潰瘍発生率をみた．早期離乳の母親から生まれた仔は21日まで母親と同居（E/N）させても，対照（N/N）より有意に潰瘍発生率が高かった．（それぞれ60%，19%，$p>0.01$）

（実験2） 上記の F_1 について出産24時間以内に母親を交換して21日に離乳し同様に拘束潰瘍の発生率をみた．早期離乳の仔を正常の母親が哺育したもの（E×N）の拘束潰瘍発生率は，正常離乳の仔を早期離乳の母親が哺育した場合（N×E）より有意に拘束潰瘍発生率が高かった．（それぞれ66%，24%，$p<0.001$）

以上の実験から，早期に母親より離乳することにより生じる拘束潰瘍にかかりやすい体質がその仔に伝達されること，その伝達は母乳を介するものではないことが証明できた．早期に母親から離しても，日齢28日目には正常離乳例と栄養学的に劣るところはない．早期離乳の母親は仔の面倒をみる時間が正常ラットより短いことが知られているが，実験2でその影響と思われる所見はなかった．これは環境の変化により母親に生じた病気にかかりやすいという体質が仔に伝達されることを示した最初の実験である．この現象をどう説明すべきかは不明である．

（関東逓信病院消化器内科
（多賀須幸男　抄）

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2012

2026/11/11 09:31:33